

仏説無量寿経の世界へ

法の仕方をされました。ですから、
たくさんのお経があるのです。親鸞
さまの師匠であった法然さまは、こ
のたくさんのお経の中から、お釈迦

(本懐)なのである」と答えられます(出
世本懐)。
続いてお釈迦さまは、阿弥陀仏といふ
さまがどのようにしてさとりを開かれ、ど
のような世界(浄土)を建立されたのかと
いうことを説き始められます。

お経とは、お釈迦さまがお亡くなりになつ
た後、その教えを正しく伝えるために、お
弟子の方々が集まり、それぞれがいろいろ
な場所でお釈迦さまから聞いた説法をまと
め、整理して残されたものです。そのため、

さまが私たちのような迷いの中で苦悩する
凡夫のために説かれたお経として、三つを
選ばれました。それが、「浄土三部経」とよ
ばれる、『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』
『仏説阿弥陀経』なのです。

まず、法蔵菩薩という修行者が、すべての
人々を救うために願いを発し、修行して
阿弥陀仏になられたことが説かれます。

お経は、「私はこのように聞かせていただき
ました」という意味の「我聞如是」という

『仏説無量寿経』は上下二巻に分れ、他
の二つに比べて量が多いので『大経』とい
われています。

法蔵菩薩は師である世自在王仏を讃える思
いを述べられ(讚佛偈)、自らも仏になるこ
とを願われます。そこで、あらゆる人々を

言葉で始まります。そして、「ある時、お釈迦
さまは王舎城の耆闍崛山(霊鷲山)にお
いでになって、一万二千人のすぐれたお弟
子たちとご一緒であった」というように、
お釈迦さまが、いつ、どこで、誰とご一緒
であった時に、この説法をされたかが最初
に示されるのです。

『仏説無量寿経』の上巻は、お釈迦さま
がいつもと違って大変光り輝くお姿である
のを、お弟子の阿難が不審に思つて質問す
るところから始まります。阿難の問いに
対してお釈迦さまは「それは、すべての人
々を救う阿弥陀仏といふ仏さまのことを、
これから説こうと思つているからであらう。

願の要点を重ねて述べられ(重誓偈)、願

お釈迦さまは、人々の悩みや苦しみの病
に応じて薬を与える「応病与薬」という説

それが私のこの世に現れた本当の目的

願の要点を重ねて述べられ(重誓偈)、願

を完成するために想像もできないような永い間の修行をされて、ついに阿弥陀仏（あみだぶつ）いう仏さまとされたことが説かれています。

そして、阿弥陀仏（あみだぶつ）は光明と寿命が限りない徳を持つ仏さまであることが説かれ（光寿無量（こうじゅむりょう））、その阿弥陀仏（あみだぶつ）の建立された浄土のさまざまなようすが説かれて、上巻が終ります。

下巻では、最初に、どうすれば私たちが阿弥陀仏（あみだぶつ）の世界に生れて仏と成ることができると示されます。すなわち、阿弥陀仏（あみだぶつ）の第ト八願が完成しているのです、私たちは南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）のばた・りきをなじるその時に、浄土に往生することが決定するのです。続いて、浄土に生まれた人々がどのような功德を得るのが広く説かれます。

また、お釈迦さまは、むさぼり・いかり・おろかさ（三毒）や人間世界のさまざまな悪行（五悪）を誡められます。

如来、下巻の最後の結びでは、弥勒菩薩（みろくぼさつ）

に対してこの上ない功德のそなわった南無阿弥陀仏（あみだぶつ）の名号（なごう）を聞いて信じ喜び、心にもち続けるようすすめられます。そして一番最後には、将来、お釈迦さま（しやくか）の説かれた教えが失われても、この教えだけはいつまでも留めおいて人々を救い続けると説いて結ばれています。

『仏説無量寿経（ぶつせつむりょうじゆきやう）』は、すべての人々が阿弥陀仏（あみだぶつ）の本願（ほんがん）を信じ念仏し、浄土に往生して仏になることが説かれた經典であります。それゆえ親鸞さま（しんらん）は「それ真実の教を顕さば、すなはち『大無量寿経（だいむりやうじゆきやう）』これなり」と仰せになるのです。

この世に出生れた本当の目的 出世本懐

出世本懐（しゆつせほんがい）とは、お釈迦さま（しやくか）がこの世に現れた本当の目的（みこころ）ということなのです。

ある時、お弟子の阿難（あなん）は、お釈迦さま（しやくか）の光り輝く姿（すがた）に気づき、そのわけを尋ねます。

お釈迦さま（しやくか）は、「私がこの世に出たのは、人々に本当の幸せを恵むため、今日（けふ）そのいわれを説き明かそう」と仰せになって説法（しやくぼう）を始められます。仏教（ぶつぎょう）では、十方（じふぱう）に無数の世界（せかい）があり、それぞれの世界（せかい）に仏（ぶつ）が現れて説法（しやくぼう）なさっていると説かれています。私たちの世界（せかい）に現れた仏（ぶつ）さまがお釈迦さま（しやくか）の御（ご）弟子（でし）です。親鸞（しんらん）聖人（せいじん）は、「正信偈（しやうしんげ）」に「如来（にやらい）所以興出世（しゆいこうしゆつせ） 唯説弥陀本願海（ゆいせつみだほんがん）（如来（にやらい）世（よ）に興（おこ）したまふゆゑは、ただ弥陀（みだ）の本願（ほんがん）海（うみ）を説かんとなり）」と、お釈迦さま（しやくか）がこの世（よ）に現れたには、阿弥陀仏（あみだぶつ）の本願（ほんがん）の教（きょう）えを説くためであつたと述懐（じゆくわい）されます。

聴衆の代表 阿難 弥勒

『大経（だいぎやう）』の説法（しやくぼう）には、多くのお弟子（でし）や菩薩（ぼさつ）が聴衆（しやうしゆ）として登場（ていじやう）します。説法（しやくぼう）の対象（たいさう）はそこに集まったすべての方（かた）ですが、特にお釈迦さま（しやくか）が直接（じやくぎやく）語りかけている方は「阿難（あなん）（アナンダ）」と「弥勒菩薩（みろくぼさつ）（マイトレーヤ）」

です。阿難は、お釈迦さまの従弟にあたり、お釈迦さまが亡くなられるまで二十年余り、お傍にお仕えし、説法を最も多く聞き続けていたので、「多聞第一」と呼ばれています。お釈迦さまがお亡くなりになった後、お経の最初の編集会議（結集）では、お釈迦さまから聞いた教えを皆の前で暗誦した方です。また弥勒菩薩は、五十六億七千万年後、私たちの世界に仏となって現れるお方です。菩薩とは、すべての人々の救いを第一に考えてさとりを求める修行者のことです。説法の最後にお釈迦さまは「後の世に、『大経』の教えを伝えてほしい」とその志を弥勒菩薩にバトンタッチなさっています。

法蔵菩薩が阿弥陀仏となる

法蔵（ダルマーカー）とは、阿弥陀仏が、仏となる前の位である菩薩であった時の名前です。ですから、「正信偈」に「法蔵菩薩四位時（法蔵菩薩の四位の時）」といわれる

のは、「阿弥陀仏が仏となる前の位である法蔵菩薩の時に……」という意味です。

はかり知れない昔、世自在王仏という仏が世におられた頃、ある国王が世自在王仏を師と仰ぎ、出家して修行者となり法蔵と名乗りました。法蔵は、生きとし生ける者が救われる浄土を建立するために、世自在王仏から二百一億ものさまさまな仏がたの世界のようすを見せてもらいました。それらの中からすぐれたところを選び取り、私たちを救うための最良の方法を見つけてくださいました。そして四十八の願いを建て、この願いを完成するために想像もできないような永い間の修行をされて浄土を建立し、阿弥陀仏とされました。私たちが必ず浄土に生れさせる願いと、はたらきが、法蔵菩薩が阿弥陀仏とされたという出来事に表されているのです。

師を讃えるー讃佛偈

「讃佛偈」は、阿弥陀仏が法蔵菩薩であった時、師である世自在王仏の説法を聞いた感動と、そこから生れた願いと決意とを、師の前で述べられた偈文（詩句）です。

まず、法蔵菩薩は、世自在王仏の身とことばと心のお徳を讃えられます。そして、自らも世自在王仏のような仏になりたいと願われます。「わたしはあわれみの心をもつてすべての人々を救いたい」。それはすべての人々を救うために発された願いでした。終わりに、その願いに偽りなきことの証明を、世自在王仏をはじめとする仏がたに求められ、「どんな苦難にあっても、仏のさとりを求めて耐え忍び、修行に励んで決して悔いがない」と、力強く決意表明して、この偈文を終えられます。

「讃佛偈」の願いは、このあと四十八願でさらに述べられてゆくのです。

途方もない時間ー五劫思惟

『五劫思惟阿弥陀仏』という名前の長髪の仏像があります。ちょうど挿絵のような仏さまです。長い間考え続けられたので、髪が伸びてこんもりとしておられます。

「劫」とは、インドの時間の単位で、極めて長い時間です。この長さを表す、「磐石劫」と「芥子劫」という二つの譬えがあります。磐石劫とは、四十里四方の巨大な石を、百年に一度薄い衣で払って、その石がすりへってなくなってしまうても劫を経たことにはならない、芥子劫とは、四十里四方の城に芥子の実を満たし、百年に一粒取り出し、すべての芥子がなくなってしまうても劫を経たことにはならない、と

められるとともに、救いの確かさを味わわれます。

法蔵菩薩の願いー本願

本願とは、仏が菩薩の位の時におこした願いのことをいいます。「この願いが成就しなければ決して仏にはならない」という強い誓いをともなっていますので誓願ともいいます。

すべての仏・菩薩は①一切生きとし生けるものをさとりに至らせ、②その煩惱を断じ尽くし、③白ら仏の教えを知り尽くし、④この上ないさとりを得たいという、四つの共通する誓願（四弘誓願）をもっています。そして、さらにそれぞれ独自の誓願があります。阿弥陀仏の場合は、法蔵菩薩の時に誓った四十八の誓願です。

四十八願のそれぞれには、「あらゆるものが救われなければ決して私は仏にはならない」と、生きとし生ける者の救いと自らの

さとりとが一体のものとして誓われています。

そこには、法蔵がどのような仏になって、どのような浄土を建立したいのか、その浄土にはどのような浄土にすれば生れることができるのか、浄土に生まれるものはどのような利益があるのか、といった内容が示されています。たとえば、その浄土には、地獄・餓鬼・畜生といった迷いの世界の名前さえないように、とか、浄土の人々はみな金色に輝くように、といったものです。

親鸞聖人はこの四十八願の中でも、次の五つの願いをといわけ大切になさっています。それは、光といのちに限りがない仏と なってすべての人々を救いたいと誓われた第十二願と第十三願。あらゆる世界の仏がたに南無阿弥陀仏の名号をほめ讃えられたいと誓われた第十七願。その名号のいわれを聞いて疑いなく信じ念仏申す者は、浄土に生れることが定まると誓われた第十八願

です。そして、その者が、必ず浄土に生れて仏となることが誓われた第十八願です。

親鸞聖人の師である法然聖人は、中でも第十八願を「本願の中の王」といわれました。そこで本願といえ、特に第十八願を指すこともあり、法蔵菩薩は、能力のある限られた者しか行えない難しい行は捨てられ、あらゆる者に開かれたお念仏による救いを、私たちのために選び取られているのです。

重ねて誓うー重誓偈

法蔵菩薩は四十八願を建てられた後で、重ねてその誓いを二つにまとめ、偈文にうたわれました。それを「重誓偈」とも「三誓偈」ともいいます。

三つの誓いとは「世に超えすぐれた願い（本願）を実現し、この上ないさとりを得よう」、「いつまでも大いなるめぐみの主となり、苦悩する人々を救おう」、「南無

阿弥陀仏という私のすぐれた名号が、あらゆる世界のすみずみにまで届くようにしよう」というものです。

そして「この願いが果たしとげられるならば、天地が震え、空から花が舞うように」と偈文を終えられました。その時、法蔵菩薩の言葉にこたえて、天地が震え美しい花が舞い、うるわしい音楽とともに「必ずこの上ないさとりを開くであろう」という声がありました。

願いを建て終えられた法蔵菩薩は、はかり知れないほどに永い修行を始められるのです。

限りない光といのちの仏

ー光寿無量

「光寿無量」とは、「光明無量」「寿命無量」をまとめた言葉です。阿弥陀仏の光明と寿命は、はかることができない（無量）とい

うことです。阿弥陀仏は四十八願のうち、第十二願に「光明無量」の仏になりたい、第

十三願に「寿命無量」の仏になりたいと誓われています。

光明は仏の智慧をあらわしています。光には太陽や月の光のように目に見える光もありますが、阿弥陀仏の光は、私たちの心を照らす光です。この光明をお釈迦さまは「最も尊い光明であり、その光が届かないところはない」と仰せになり、十二の名前をつけて讃えられました。これを十二光といっています。親鸞聖人も「正信偈」に「あまねく無量・無辺光・無礙・無対・光炎王・…」と十二光を挙げられて、阿弥陀仏の光明を讃えられています。

寿命は、仏の慈悲をあらわしています。阿弥陀仏の寿命が無量であるということは、阿弥陀仏が永遠の仏さまであるということです。

阿弥陀仏が「光寿無量」の仏になるといって実現されたのには理由があります。光明に限りがあれば、その光の届かないとろ

に在るものは救うことができません。命に限りがあれば、阿弥陀仏が命終えられた後のものを救うことができません。阿弥陀仏の本願は、あらゆるいのちあるものを救いたい、というものでした。「光寿無量」はそれを実現するのに不可欠なのです。「光寿無量」は阿弥陀仏のはたらきが空間的にも時間的にも限りがないことをあらわしています。

さて、昔、インドでは限りない光のことを「アミターバ」、限りないのちのことを「アミターユス」といいました。「アミター」は「量ることのできない」という意味の言葉で、中国で「阿弥陀」の字が当てられました。阿弥陀仏のお名前には、限りない光の仏さま、限りないのちの仏さまという二つの意味が込められています。そこで、阿弥陀仏を「無量光仏」「無量寿仏」とも申し上げるのです。

清らかな世界ー浄土

「浄土」とは、私たちの住む穢土に対する言葉です。煩惱をそなえ苦悩する私たちを救うために、法蔵菩薩が想像もできない永い間、修行して建立された、煩惱のけがれを離れた清らかな世界です。

『大経』には、浄土は、「西方に、十万億の国々を越えたところ」にあり、金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・磲磈・碼碯の七つの宝でできており、実にひろびろとして限りがない」と説かれています。また、「いろいろな宝でできた蓮の花がいたるところに咲いており、それぞれの花の中から、三十六百千億の光が放たれ、そのそれぞれの光の中から、三十六百千億の仏がたが現れる」と、大變うるわしいようすが説かれています。親鸞聖人は、この阿弥陀仏の浄土を、法蔵菩薩の本願に報いて完成された浄土ということ、**「眞実報土」**といわれ、さどりの世界であるといわれています。ですから、浄土に

往生すると、ただらに仏に成らせていただけるのです。

聞くまが信することー聞信

浄土眞宗は、聞法の宗教”といわれます。また、ご信心が一番大事ですよ”といわれます。それは、聞くまがそのまま信ずるということの意味しています。

『大経』の下巻のはじめには、法蔵菩薩の願いがその通りに完成して、生きとし生ける者に、信心による救いの道が開かれていることが説かれています。

それは、十万の仏がたが讃える南無阿弥陀仏の名号のいわれを聞いて疑いなく信じるその時に、浄土に往生することが定まるということです。

では、南無阿弥陀仏の名号のいわれとはどういうことでしょうか。過去・現在・未来にわたって救われるはずのない私のために、法蔵菩薩が五劫という長い長い時間をかけ

てお考えになり、さらに、想像できないほど永いご修行の末に阿弥陀仏となられ、南無阿弥陀仏の名号を救いの法としてお与えになりました。これが名号のいわれで、それを聞くということが聞法の営みなのです。南無阿弥陀仏の名号とは「お前を必ず救うぞ」いう阿弥陀仏の喚ひ声です。南無阿弥陀仏という名号を通して聞える仏の救いの声を、疑いなく受け入れること、このことがご信心をいただくということなのです。

弥勒菩薩に念仏の教えを授ける

お釈迦さまは説法を結ばれるにあたって、念仏の教えを後世に伝えるよう弥勒菩薩に授けられます。お釈迦さまが伝えられたのは、南無阿弥陀仏の名号のいにわれを聞いて信じ喜び、わずか一声でも念仏を称えるものには大きな利益が恵まれるという教えです。「たとえ世界中が火の海になったとし

ても、ひるまずにこの教えを聞かなければならない」とお釈迦さまはおすすめになりません。

続けてお釈迦さまは、「仏教の教えが失われてしまっても、『大経』の教えを百年の間この世に留める」といわれます。後に、法然聖人はこれを解釈して、お釈迦さまが『大経』の教えを百年留める」といわれたのは、「特に念仏をいつまでも留める」とことであると捉えられ、いつの世にもお念仏が通用することを明らかにされました。

お釈迦さまがこの教えを説き終ると、弥勒菩薩をはじめ、そこに集うすべての者が、心から喜んだ、と説かれています。

ようこそ

仏説観無量寿経の世界

「仏説観無量寿経」は『無量寿仏観経』

ともいい、略して『観経』ともいわれています。このお経はお釈迦さま在世時、インドのマガダ国の首都であった王舎城（ラージャグリハ）に起つた悲劇を契機として説かれたものです

マガダ国の王子である阿闍世（アジャータシヤトル）は、提婆達多（デーヴァダダ）という悪友にそそのかされて、国土である父の頻婆娑羅王（ビンビサーラ）を捕え、むりやり宮殿の奥深い牢獄に閉じこめてしまいます。王妃である韋提希夫人（ヴァイデーヒー）は王の身の上を気づかい、密かに食物と飲み物を運び王に与えます。元気をとりもどした王は遙かに耆闍崛山（霊鷲山）におられるお釈迦さまに、お弟子を遣わして説法してくださいと頼みます。やがて阿闍世は獄中の父王が母や仏弟子に助けられ

て延命している事実を知り、激怒して母を切り殺そうとします。しかし月光と耆婆と

いう二人の大臣の命がけの説得によって殺害は思い止まりますが、母を宮殿の奥深くに閉じこめてしまうのです。

我が子によって幽閉された韋提希は、絶望のどん底に落とされながらも耆闍崛山におられるお釈迦さまを心に念じ教えを請います。お釈迦さまは、韋提希のこのろを見抜き、すぐに目連と阿難を伴って自ら王宮の韋提希の前に出現されます。韋提希はお釈迦さまの足もとに身を投げ出し号泣しながら、「どうか私のために苦しみ悩むことのない世界をお教えてください。私はこの濁りきった悪い世界にいたくありません」と訴えます。するとお釈迦さまは眉間から金色に輝く光を放ち、数限りない仏がたの浄らかな国土（浄土）を韋提希にお見せになります。韋提希はその中から特に阿弥陀仏の極楽浄土を選び、そこに往生するための方法を説かれるようにお釈迦さまに懇願します。するとお釈迦さまは、浄土の教えを説

く機縁の訪れたことを喜び、微笑まれて「阿弥陀仏はこの世界からそれほど遠くないところにおいてになるのだよ」と仰せられ、韋提希と浄土往生を願うすべての人々のために、三種の清らかな善い行い（三福）と、極楽を観想するち法を示されます。

まずお釈迦さまは韋提希の願いによって、精神を統一して思いを西方にかけ、阿弥陀仏とその浄土を心に思い描く方法を（定善の観法）をお説きになられます。最初に夕日が西の空に沈みゆく光景を頭の中に焼き付くようになるまで観ずる「①日想観」から始まり、清らかで透きとおった水や氷を観ずる「②水想観」、美しい極楽の瑠璃の大地を観ずる「③地想観」、美しく飾られた極楽の樹々を観ずる「④宝樹観」、七宝の蓮華を生ずる八つの池水を観ずる「⑤宝池観」、五百億の楼閣を観ずる「⑥宝楼観」と順を追って説かれていきます。

苦悩を除く法を説こう」と仰ったとき、その言葉に応じて、阿弥陀仏が突然空中にお姿を現してお立ちになり、（住立空中尊）、その左右には観音・勢至の二菩薩がつきそっておられるのを韋提希が目当りにし礼拝します。ついで韋提希が未来の衆生のために阿弥陀仏を拝見する方法を尋ねたので、お釈迦さまは阿弥陀仏の蓮華の台座を観ずる「⑦華座観」を説かれ、さらに、仏のお姿を克明に観ずる「⑧像観」、阿弥陀仏の真実のお姿と光明を観ずる「⑨真身観」を説かれます。次に観音菩薩を観ずる「⑩観音観」、勢至菩薩を観ずる「⑪勢至観」を説き、あらためて一切の浄土のすがたを観じて滅罪と往生の利益を得る「⑫普観」、あるいは自分が極楽浄土に往生しているありさまを観ずる「⑬雜想観」といった十三種の観法を説かれます。

お釈迦さまはこれらの観法をお説きになられてから、さらに凡夫が散り乱れている

心のままで、悪を捨てて善行を修して浄土に往生する方法（散善の行）を自ら説き開かれます。これを上品上生から下品下生までの九種に分類してお説きになられ、最初の上品上生では、浄土往生を願うものは、至誠心と深心と回向発願心という三種の心（三心）を起して往生することが説かれています。また最後の下品下生では、人間として最も重い悪を犯した罪人でも、臨終の間際に教えを説く善き人（善知識）に出会い、「南無阿弥陀仏」と口に十回称えるならば、仏の名を称えたことよって、命終わるとき、たちまちに極楽に往生することができるとお示しになるのです。

このようなお釈迦さまの説法を聞いた韋提希とその侍女たちは、極楽世界のありさまや、阿弥陀仏と観音・勢至の二菩薩を見て歓喜の心が起り、すべての迷いが晴れてさとりを得ようとする心を得て、みな浄土往生を願ったのです。さらにお釈迦さま

は弟子の阿難に、この説法のかなめは念仏にあることを強調され、「もし念仏するものがないなら、その人は白く清らかな蓮華（分陀利華）ブンダリーカ」と讃えられる尊い人である」と仰せになり、最後に「あなたは阿弥陀仏のみ名（名号）をしつかりと心にたもちなさい」と説かれ、耆闍崛山にお帰りになられたのです。

そこで阿難は他の大衆のために王舎城で説法を再説しますと、大衆は大いに喜んだのでした。

『観無量寿経』の名所解説

王舎城の悲劇 『観経』の発端

お釈迦さまが、王舎城の耆闍崛山（靈鷲山）で千二百五十人の修行僧や文殊

菩薩をはじめとする菩薩がたに説法していた時のことです。ちょうどその時、王舎城では大変な出来事が起っていました。マガ

ダ国の頻婆娑羅王が、お釈迦さまのいとこの提婆達多にそそのかされた息子・阿闍世によって、牢獄に幽閉されたうえ殺害され、母・韋提希も殺されそうになる事件が起つたのです。これを「王舎城の悲劇」といいます。



この悲劇はさかのばれば阿闍世の出生に原因がありました。頻婆娑羅王と韋提希は長らく子どもに恵まれませんでしたが、そこで古い帥にたずねると、ある仙人がやがて死に、王子として生れ変わってくると予言し

ました。ところが王はそれを待つことがで

きずに、家来にその仙人を殺すよう命じますが、仙人は、「王の子となったら王を殺すであろう」と言つて息絶えました。やがて韋提希は懐妊しますが、王は仙人の言葉が恐ろしくなり、高樓からその子を産み落とさせました。けれども、その子は小指にきずを負っただけで、命をとりとめたのです。その後、阿闍世は何事もなかったかのように成長して世青年となりました。

提婆達多は、お釈迦さまか多くのの人から敬われていることに嫉妬し、お釈迦さまを殺して、教団を支配しようとたくらんでいました。そこで釈尊を慕う頻婆娑羅王を殺害させるために、青年となった阿闍世に出生にまつわる話を告げたのです。これによつて、阿闍世の父に対する尊敬の念は一転して憎悪へと変りました。父を牢獄に監禁し、食事を与えず、餓死させ、さらに王を助けようとした韋提希までも殺そうとした

のでした。

韋提希夫人

— 『観経』の主人公

韋提希は、二人の大臣が阿闍世を説得したことよつて死は免れますが、宮殿の奥に閉じこめられてしまいます。この『観経』でのお釈迦さまの説法は、わが子阿闍世に幽閉された韋提希の苦しみを除くために説かれたものです。

わが子に夫を幽閉され、自身も牢獄に閉じ閉められた韋提希の悲しみ、怒りはいかにばかりであったでしょう。しかし、この苦しきもとはといえれば自分自身から出たこととです。それにもかかわらず「お釈迦さま、わたしはこれまでに何の罪があつて、このような悪い子を生んだのでしょうか。お釈迦さまもどういった因縁があつて、あのような提婆達多と親族でいらつしやるのでしょうか」と言わざるをえません。このような状況の中にあつて韋提希は、憂いと

悩みのない世界に生れたいと願ひ、特に阿弥陀仏の浄土に往生する行法をお釈迦さまに教えていただきたいと懇願します。

そしてついにお釈迦さまが説かれた阿弥陀仏の教えを聞いて、韋提希は絶望から立ち上がり、無生法忍の利益を得ます。人生の中で、さまざまなこと苦しみ、愛と憎しみの思いに振り回される私たち凡夫が、阿弥陀仏の教えによつて救われていくことを、この韋提希の救いから教えてくさつていきます。

阿闍世 父を幽閉した王子

阿闍世は、お釈迦さま在世当時のインドのマガダ国の王で、二十二年間在位し、お釈迦さまの滅後二十四年に没したと伝えられます。生れる前から怨みを抱いてきた者という意味で「未生怨」とも呼ばれます。提婆達多から自らの出生の因縁を聞かされ

て、夫母を怨み、夫王を幽閉して王位を奪い、さらに王を助けようとした母、韋提希をも幽閉しました。このことを嘆いた韋提希が救われていくことを説いたのが『観経』ですが、『涅槃経』には罪を悔いた阿闍世が、大臣の耆婆の勧めによってお釈迦さまのもとに行き、無根の信を得て救われることが説かれています。

阿闍世はこの後、お釈迦さまに帰依して、仏教教団の外護者となりました。お釈迦さまの滅後、八分された遺骨の一つを王舎城に迎えて、塔を建て供養しました。また、第一結集(最初の聖典編集公議)の際には、財的に援助したといわれています。

定善二善 二つの往生行

阿弥陀仏の浄土へ往生する方法を尋ねた韋提希に、お釈迦さまが多く時間を割いて説かれたのが定善であり、また散善という行法です。

定善とは、心を静めて精神統一を行い雑

念を払って、阿弥陀仏とその浄土とそこにおられる菩薩方をお経に説かれている通りに観察する行です。『観経』では十三の観法が説かれています。中心となるのが、阿弥陀仏のお姿を観察する「真身観」です。この『観無量寿経』というお経の名前も、この真身観に由来しているといえます。

また、お釈迦さまが、定善という難しい行ができない者のために説かれたのが、散り乱れた心のままで悪をやめ善を修める散善という行でした。散善には、菩提心を起こし、大乘仏教のお経を読み人ひとに教えを勧める大乘の善行(行福)、仏・法・僧の三宝に帰依し戒律を守る小乗の善行(戒福)、親孝行や不殺生といった世間的な善行(世福)の三つがあり、三福といわれています。

住立空中尊

阿弥陀さまのすがた

お釈迦さまは、韋提希の願いによって浄

土のすがたをこころに思い浮べるが方法を順序立てて説いていましたが、浄土を観察する最後の華座観の前になって、突然、阿弥陀仏が現れるという出来事がおこりました。

それは、煩惱に振りまわされ苦悩に沈む韋提希に向かって、「今からあなたのために苦悩を除く法を説きましょう」とお釈迦さまがいわれ、そのまま沈黙された時のことでした。その声に応じて「その法とは私のことである」と阿弥陀仏が観音・勢至両菩薩を伴って韋提希の前に現れたのです。

阿弥陀仏を拝見した韋提希はこころに歓喜を生じ無生法忍を得ました。この阿弥陀仏のおすがたは、「撰め取って捨てない」という大悲のこころそのものです。

このように阿弥陀仏がじつとしていてることができずに、自ら立ち上がって撰取しにきたすがたを住立空中尊といい、苦悩するものを救うという大悲の極まりが顕され

ています。

九品段 九種類の往生

お釈迦さまは、精神を統一して阿弥陀仏や浄土のすがたを観察する行（定善）を説かれ、ついでそのような高度な行ができない人のために、日常の散乱した心のまま善根を修める方法（散善）を自ら説かれました。

その散善の行法を行う人を、広く上品生から下品下生までの九品（九種類）に分けて詳しく述べたものが九品段です。

上品上生・上品中生・上品下生の三機は大乗の善である行福を修する善凡夫であり、中品上生と中品中生の二機は小乗の善を行う戒福をたもっている善凡夫であり、中品下生は世福を行っている善人の凡夫です。そして下品上生・下品中生・下品下生の三機は、先ほどの三福の善行を行わずることのできない、平生に悪ばかりを造ってきた罪悪の凡夫で、罪の軽重によつ

て三種に分けたものです。下品下生の人はその中でもっとも重罪の人です。これらの下三品の人たちに説かれたのが念仏でした。九品の人はそれぞれの行法の程度によつて、臨終に来迎があり、それぞれの浄土に往生すると説かれています。

三心

浄土往生に必要な三心の心

お釈迦さまは、九品段の最初の上品上生のところに、浄土に往生したいと欲うものは三種の心を起さなければならぬと、至誠心、深心、回向発願心の三心を説かれました。この三心は、上品上生に説かれていますが、九品全体や定善にも通じていて、まさに『観経』令休の要となるものです。その至誠心とは、内と外が相応した真実の心であり、深心とは深く信ずる心で機と法の二種があります。一つは「機の深信」といわれるもので、自身は現に罪悪生死の凡夫であつて迷いの世界を逃れ出る

手がかりさえないと信じていることで、二つは「法の深信」といわれるもので、阿弥陀仏の本願はこのような迷いに沈む凡夫を必ず救いとして往生させてくださると疑いなく信じていることです。この二つの心は別物ではなく、煩惱具足の凡夫を必ず救うという本願を聞き受けている信心ですから、一つの信心を開いたものです。また回向発願心とは、浄土に往生しようと願う心です。この三心は、定善や散善の行と一緒になければ自力の三心となり、本願の念仏と組み合わせれば、『大経』の至心・信楽・欲生の三心と同じ他力の真実の信心になります。

下下品の念仏

極悪人に説かれた教え

九品の行者のなかで、下品の三種の人びとは、定善という難しい行はもちろん、散善さえもできず、生涯罪を造り続けてきた悪人です。特に下品下生の人は、父母を殺す

といった五逆・十悪という重い罪を犯した人で、まさに極悪人といえます。

その悪人が命終えようとする時に、はじめて善き人（善知識）が念仏をすすめるのに遇います。しかし苦しくてこころを静めて念仏することができません。善知識は、こころに思うことができないのであれば、ただ口のみ名を称えなさいと教えます。それを聞いてただ「南無阿弥陀仏」と称えること、わずか十声して、迷いのものである罪が除かれ、往生することができたと説かれています。

ただ、この人は往生するといつても上品や中品の人のように恵まれた環境が与えられません。例えば上品中生の人が土に往生したとき、大きな宝の花に包まれ、その花が開くの要する時間は一晩だけですが、下品下生の人の場合は十二大劫という計り知れないほど長い時間を経なければなりません。

このように往生した後の様子を見ると下品下生の人が行ずる念仏行は、定善や散善に比べて劣った行であるかのように説かれています。それは、下品の人が念仏を自力の心でとらえて、価値の低い行とみたらに他なりません。しかしもともと念仏は阿弥陀仏が選択され、誓われた行でしたので、お経の最後になって、この念仏が『観経』の主役に躍り出ることになるのです。

分陀利華 ―白く清らかな蓮の花―

お経の最後には、そのお経で説かれた教えが人々の間に広まっていくことが願われます。『観経』の流通分でお釈迦さまは、念仏の持つすばらしさを説かれ、念仏する者は、「分陀利華」、すなわち白く清らかな蓮の花のような尊い人と讃えられます。白い蓮は、蓮の中でも最も高貴なものとされ、

仏や真実の教法の喩えとされ、念仏の行者、信心の人を讃嘆する言葉とされます。

中国の善導大師は、阿弥陀仏の本願を信じて念仏する者を、お釈迦さまと阿弥陀のおこころにかなった人として仏から好まれる「好人」、いいつくせないほどのうるわしい「妙好人」、人の中の最上である「上上人」、世にも希な「希有人」、最も勝れた徳をいただいている「最勝人」とも呼ばれています。親鸞聖人も「正信偈」に、「一切善悪の凡夫人、如来の弘誓願を信じれば、仏、廣大勝解のひととのたまへり。この人を分陀利華と名づく」と、本願を信じる者は、広大な仏の心を受け止めた勝れた人であり、白い蓮の花といわれている。

浄土貞宗では古くから、本願を信じ念仏する人を、泥沼に咲いた白蓮華のような「妙好人」と呼んで讃えてきましたが、それはこの『観経』にもとづく言葉だったので。

阿難付属

一念仏を伝授する

さらに流通分では、お釈迦さまが、このお経で訳かれた一番大事な内容を弟子の阿難に伝授されます。

今までお釈迦さまの説法はほとんど定善と散善を説くことに費やされました。その中でも阿弥陀仏や浄土を思い浮べる定善の教えが中心でした。ですからここで弟子の阿難に授されるのは、定善の教えと考えるのが普通でしょう。しかし、お釈迦さまは最後に意外なことをいわれます。「そなたは阿弥陀仏の名号をしっかりと心にたもちなさい」

お釈迦さまが一番お伝えになりたかった教えは、阿弥陀仏の名号を称えること、つまり念仏の教えだったのです。これまで念仏が説かれたのは、散善の中に少しだけそれも下品という悪人が行ずる価値の低い行

としてでした。

善導大師は、この意外なお答えをされたお釈迦さまの気持を、「これまで定善二善の利益を説いてこられたけれど、阿弥陀仏の本願のところに望めれば、お釈迦さまの本意は、人びとをしてひかすら阿弥陀仏のみ名を称えさせることにある」と見抜かれました。お釈迦さまの本心は、韋提希のように煩惱に振り回されている愚かな凡夫を救うために阿弥陀仏が選ばれた、念仏の教えを説くことであつた。

「浄土三部経」の見方

浄土真宗の正依の經典である「浄土三部経」のうち、親鸞聖人は『大経』を真実の教えといわれました。それでは『観経』と『小経』をどのようにみられたのでしょうか。

聖人は『観経』と『小経』は二重の構造をもったお経であるといわれました。ま

ず、『観経』では、表面には、精神を統一して行う観法である定善と散り乱れたところで行う善根である散善が説かれているとみられました。ところがその裏面には『大経』と同じ他力念仏が説かれているとみられたのです。また『小経』も表面には一日より十日、十日より百日称えた方が功德があると考える自力念仏が説かれているとみられますが、その裏面にはやはり『大経』と同じ他力念仏の教えが流れているとみられたのでした。

このように三部経は、『大経』の教えと一致して三経ともに真実の教えが説かれているとみる側と、それぞれ『大経』には第十八願のころである他力念仏の往生か説かれ、『観経』には第十九願のころである自力の諸行の往生か説かれ、『小経』には第二十願のころである自力念仏の往生か説かれているとみる側があります。これはお釈迦さまの本意は他力念仏にある

のですが、それを直接に受け取ることができない人に対して説かれたのが『観経』『小経』の自力力念仏の方便の教えであって、真実の他力念仏に引き入れるために説かれた誘引方便の教えとすることです。ここに私たちを必ず真実に導き入れようという仏の大悲のところがうかがわれます。

ようこそ

仏説阿彌陀經の世界へ

『仏説阿彌経』は「浄土三部経」の中で、いちばん量が少ないので略して『小経』ともいいます。このお経はお釈迦さま在世当時、インドのコーサラ国の首都・舎衛城の西南にある祇園精舎において、千二百五十人のすぐれたお弟子たちの前で説かれたものです。誰も何も質問していないのに、お釈迦さま自ら智慧第一の舍利弗に一方的に呼びかけておられるのが特徴です。

お釈迦さまはまず「ここから西の方へ十

万億もの仏がたの国々を過ぎたところに極楽と名づけられ世界がある。そこには阿彌陀仏という仏がおられ、今現在も教えを説いておられる。この世界は一切の苦がなく楽のみであるから極楽というのである」と極楽浄土と阿彌陀仏について説き始められます。

その極楽浄土のすばらしいありさま、環境をお説きになり、極

楽には金・銀・瑠璃・水晶の四宝で飾られた垣、網飾り、並木があつて、

七宝で飾られた池には八種類の功德をもつ

水がたたえられ、底には金の砂か敷きつめ

られ、また池の中には車輪のように大きな

蓮華が咲いており、青色・黄色・赤色・白

色の花からそれぞれの色の光を放って輝い

ている。常に美しい音楽が奏でられ、大地

は黄金であり、花の雨が降りそそぎ、鳥や

風や樹々が麗しいさどりの音声を響かせて

いると詳細に説かれます。

そしてこの仏を「阿彌陀」と名づけるい

われについて述べられます。阿彌陀とは光明無量・寿命無量という意味で、これは仏のみではなく浄土に生れた人々も同じように光明無量・寿命無量にするという徳をもっているから阿彌陀というのであると説かれます。極楽浄土にはまた数限りない声聞の弟子がいて阿羅漢のさとりを開いていると示されています。

その極楽浄土に往生すれば、浄土のすぐれた菩薩がたと俱に同じところに集う（俱会一処）ことができるといわれます。

しかし極楽にはわずかな善根功德を積むだけではとても往生することはできず、阿彌陀仏の各号を聞き、その名を心にとどめ称えること一日から七日の間、一心に思いを乱さなければ、命終ればすぐさま極楽浄土に生れることができると説かれます。

つづいて東方・南方・西方・北方・下方・上方という六方の世界には、ガンジス河

の砂の数ほどの仏がたがおられ、それぞれ
の国において阿弥陀仏の救いの法をほ讃え、
それが真実であることを証明（証 誠）さ
れていると説かれます。さらに阿弥陀仏の
名号を聞き、この経の名を聞くものはさと
りに向かって退くことのない位に至ると念
を押されます。

最後に、お釈迦さまはに五種の濁りある
の娑婆世界の中にあつて、この上ないさと
りを得て、世間の人々のためにこのような
信じ難い法を説く（難信の法）ということ
は、甚だ困難なことであると述べ、この話
を結ばれます。

『阿弥陀経』の名所解説

祇園精舎

『阿弥陀経』の舞台

コーサラ国の首都舎衛城（サーバッティ）
に須達（スダッタ）という大商人がいまし
た。彼は、孤児や老人など恵まれない孤独

な人びとに衣食を提供していたので、
「給孤独長者」とも呼ばれ人々から尊敬さ
れていました。須達はマガダ国の首都

王舎城（ラージャガハ）に滞在中、たまた
まお釈迦さまの説法に出会い、その教えに
深く帰依する信者となりました。後年、自
分の街にもお釈迦さまを招きたいと考え精
舎（寺院）を建てる場所を探しました。そ
して、コーサラ国の祇陀（ジュータ）王子
が所有する広大なマンゴーの樹林の園に目
を付け、「その土地を譲ってほしい」と申し
出ましたが、王子は冗談に、「その土地に黄
金を敷き詰めたら譲ろう」と答えました。

ところが驚くことに須達は、王子の言う通
りに、金貨を敷き詰めました。感動した王
子は須達はその土地を譲り渡し、精舎建立
にも協力しました。この精舎は二人の名前
にちなんで「祇樹給孤独園」といわれ、略
して「祇園精舎」と呼ばれています。お釈迦
さまは、夏の安居（雨期の勉強会）にしば

しばここに在住されました。『阿弥陀経』は
この祇園精舎が舞台となっています。

祇舎利弗への呼びかけ

『無間自説の経』

『阿弥陀経』は經典ではめすらしく、お釈迦
さまに問いを発する人がいません。「舎利弗
よ」「舎利弗よ」と、お釈迦さま自らが、
弟子の舎利弗に繰り返し呼びかける形式で
説法が進められます。このことから『阿弥
陀経』は「無間自説の経」とも呼ばれてい
ます。

さて、お釈迦さまが呼びかけている舎利弗
（シャーリプトラ）は、王舎城外のバラモ
ンの家に生れ、はじめ、六師外道一人と言
われる懐疑論者の刪闍耶（サンジヤヤ）の
弟子となりました。ある時、托鉢をしてい
た阿説示（アヨサジ）から、お釈迦さまの
教えを示す短い詩句を聞いて、たちまちに
「縁起の理法」を理解したといえます。そ

して、同門の目連（マウドガリヤーヤナ）とともに刪闍耶の弟子二百五十人をひきつれて、竹林精舎を訪ね、お釈迦さまに帰依し弟子となりました。舍利弗は智慧第一と呼ばれ、十大弟子の筆頭に挙げられる人物でしたが、お釈迦さまに先だつて逝去したといわれます。

西方―西の彼方の世界

『阿弥陀経』には、この娑婆世界の西の彼方に阿弥陀仏の浄土があると説かれます。

西は太陽が沈む方角です。一日を人の一生になぞらえれば、夕暮れ時、西の山の端に夕日が隠れていく光景は、命の消えゆく様ようではないでしょうか。私たちにとつて西は、何か終りを感じさせる方角です。そして阿弥陀仏の浄土が西方にあるということは、先立つた人たちがいる世界、この生を終えた後に往く世界として、私たちの

感覚にととても親しいものです。

一方、『大経』には浄土を西方と示しつつも、「その国土は限りなく広大である」と説かれ、天親菩薩は「はかり知れないことは虚空りようであり、広大であつてきわまりがない」と表現されています。浄土は一面において、方角を超えた無限の世界であり、私たちの思いを超えたさとの領域なのです。その世界を私たち凡夫にもわかるようにと、慈悲をもつて仏が建立してください。私たちが西方の浄土です。私たちのためのご苦労を思うとき、阿弥陀仏の浄土がより身近に、また、有り難く感じられます。

極楽世界の荘厳

―きらびやかな光景

『阿弥陀経』には、極楽世界のきらびやかな光景が表現豊かに説かれています。樹木をはじめ、池、大地、音楽、花、鳥、風など、安楽世界の白然が感覚的な美しさで表現されています。

七つの宝でできた池には八種の功德をそなえた水が満ちあふれ、その中には車輪のように大きい蓮華の花が咲いていて、青色の蓮華には青い光あり、黄色の蓮華には黄色の光があると、それぞれに独白の光を放っているといわれます。極楽世界では一つひとつのものが、みなともに光り照らし合っています。阿弥陀仏の本願によってできた平等の世界といえます。また極楽には種々の美しい色の鳥がいて、昼夜に三度ずつ集まって、美しい調べを奏でています。しかもその鳴き声は尊いさとの内容を説いているのです。極楽にいる人々その声を聞いて三宝（仏・法・僧）を念じるといわれます。これらの鳥たちは法を説きのべるために阿弥陀仏が変化されたものです。ちなみに共命鳥とは極楽世界の絵を見ると、女性の顔をした一身二頭の鳥で、複数のものが仲良く生きていく姿に喩えられます。極楽浄土は煩惱のけがれを離れた清らかな

世界です。永遠の真理の世界を象徴的な形で表現されたものと言えます。私たちはその美しい元景にのみ目を奪われることなく極楽浄土が真実なる世界であることを見つめ直したいですね。

阿弥陀仏の名義―お名前の意味

お釈迦さまは阿弥陀仏という仏さまのお名前の意味について、「その仏の光明は限りがなくすべての国々を照らしてさまたげるものは何もない。またその寿命も限りがなく、はかり知れないほど長い。それで阿弥陀と申しあげるのである」と仰せになり、阿弥陀という言葉には光明無量と寿命無量の二つの意味がこめられていることを説かれます。『大経』の法蔵菩薩の四十八願のなか、第十二願では光明無量の仏になりたいと誓われ、第十三願では寿命無量の仏になりたいと誓われていますが、この二つの願いを完成され仏であるか

らこそ阿弥陀仏と申し上げるのです。光明というのは空間、寿命は時間です。この時間的にも空間的にも限りない仏であるからこそ、いつでもどこでも私たちはその救いのなかに生かされているのです。

俱会一処―再び相まみえる世界

「俱会一処」とは最近あまり見かけませんが、墓石に刻まれているので有名な言葉です。「ともに一処に会する」と読み下し、「一処」「同じところ」ということで極楽国土を指しています。



浄土の聖者たちと極楽国土で出会い、交わることができるという意味です。

親鸞聖人は門弟

へのお手紙の中で、「一つところへまゐりあふべく候ふ」とも「浄土にてかならずかならずまぢまゐりあふべく候ふ」ともいわれ、

同じ浄土に往生して待っています、といわれているのもこの「俱会一処」の味わいのことでしょう。門弟への親鸞聖人の篤い思いがそこに見えます。世間的にいうなら、この娑婆世界の縁が尽きて亡くなられた有縁の方々に対しては、現実的に悲しみが先に立ちます。しかし、再び相見える世界があることを思うとき、残された者には縁尽きた悲しみよりも、ともにまた会することの素朴な喜びが満ちてくる癒やしのある言葉だと思ふのです。

執持名号

―名を聞いて心にとどめ念仏する

『阿弥陀仏』の本論（正宗分）は、大きく三つに分けられます。初めに阿弥陀の極楽浄土や仏・聖衆のすぐれたすがたを説いた〈依正段〉、ついで衆生の念仏往生について述べている〈因果段〉、最後に六方の無数の仏がたが念仏往生を証明し護つておられる〈証誠段〉の三つからなります。

その念仏往生の段には、少ない善根では

往生することはかなわず、名号を執持する

念仏によつて往生する二とができる」と説か

れています。少ない善根とは、『観経』

の表面に説かれた自力諸行のことであり、

名号を執持するとは、阿弥陀仏の名号を聞

いてこのころにとどめ念仏することです。

この「名号を執持すること」の後に、「も

しは一日……もしは七日、一心にして乱れ

ざれば」との文がつづくので、ややもすれ

ば一日の念仏よりも二日、さらには七日の

念仏が勝れているように思い、自らの力を

たのみとするかも知れません。そこで

親鸞聖人は、この〈因果段〉は他の段とは

違つて二重の構造をもち、表からみれば自力

念仏を説いているようだけど、その裏側に

は真実の他力念仏往生が説かれているとみ

られ、『阿弥陀経』を間違ひなく拝読できる

ようにと心を尽されました。

極証誠護念

「仏がたがほめ讃え護る

東方に、阿闍鞞仏・須弥相仏・大須弥仏

・須弥光仏・妙音仏……南方に……西方に

……北方に……下方に……上方に……」『阿

弥陀経』の後半には、たくさんのお仏がたの

名前が出てくる段があります。ここが〈証

誠段〉と呼ばれている部分です。

阿弥陀仏の功徳をほめ讃えているのはお

釈迦さまだけではありません。東方・南方

・西方・北方・下方・上方の六方におられ

るガンジス河の砂ほどの無数のお仏がたも、

それぞれの国で、阿弥陀仏のすぐれた徳が

真実であることを証明し、「すべてのお仏がた

がお護りくださるこの経を信じるがよい」

と世の人々に仰せになっています。

このお仏がたは、それぞれ三千大千世界と

いわれるほどの多くの世界を覆うだけに広

く長い舌を出しています。世界の隅々にま
で、阿弥陀仏のすぐれた徳が真実であるこ
とを証明するためです。

このようにお仏がたがほめ讃える阿弥陀仏
の名とこの経の名を聞く者は、お仏がたに護
られて、この上ないさとりに向かつて退く
ことのない位に至ることができるのです。

五濁悪世―娑婆世界の有様

お釈迦さまは我々のこの娑婆世界の有様
を、「五濁悪世」という言葉でお説きになり

ます。五濁とは「劫濁・見濁・煩惱濁・

衆生濁・命濁」のことで、五つの濁りにみち

た悪い世の中ということ。①「劫濁」とは、

時代の濁りです。戦争や疫病、飢饉や公害な

どの社会悪が増大することをいいます。②

「見濁」は、思想の乱れをいい、邪悪な思

想、偏った見解がはびこることです。③「煩

悩濁は、貪り、怒り、愚かさなどの煩惱

が燃えさかり、悪徳が人間社会を覆うこと

をいいます。④「衆生濁」とは、衆生の資質が低下することで、人間性の墮落によって社会全体が乱れ、人々は悪行をほしうまにします。⑤「命濁」とは、衆生の寿命が次第に短くなることをいいます。自分勝手な欲望を満たすために命の尊厳を見失い、他の命だけでなく、自らの命をも損い無駄にする生き方をいいます。今日の地球温暖化などはまさしく命濁といえるでしょう。

難信の法ー信じ難い法

『阿弥陀経』の最後（流通分）に至ってお釈迦さまは「難信の法」を説いたといわれています。難信とは、信じ難い教法ということでしょう。お釈迦さまと無数の仏がたは阿弥陀仏の不可思議な功德を讃えて、信を勧められています。濁りきった五濁の世界においてその衆生を救うためにきわめて信じ難い法を説かれたのでした。いまここに念仏往生か説かれ、それが信

じ難い教えであるといわれているのは、教えの難しさをいうのではなく、逆にそれを賞讃している言葉なのです。それと同時に、信じることを難しくしているのは自らがつくりだしている疑い心であり、自力にとらわれているために難信といわれるのです。そのとらわれた心を捨て仏力による時、信じ難い教えではないことを指し示しているのです。

『浄土三部経』ーの見方

浄土真宗の正依の經典である「浄土三部経」の内、親鸞聖人は『大経』を真実の教えといわれました。それでは『観経』と『小経』はどのようなみられたのでしょうか。

聖人は『観経』と『小経』は二重の構造をもったお経であるといわれました。まず『観経』では、表面には精神を統一して行う観法である定善と散り乱れたところで

行う善根である散善が説かれているとみられました。ところがその裏面には『大経』と同じ他力念仏が説かれているとみられたのです。また『小経』も表面には一日よりも十日、十日より百日称えた方が功德があると考える自力念仏が説かれているとみられますが、その裏面にはやはり『大経』と同じ他力念仏の教えが流れているとみられたのでした。

このように三部経は、『大経』の教えと一致して三経ともに真実の教えが説かれているとみる側と、それぞれ『大経』には十願のころである他力念仏の往生が説かれ、『観経』には第十九願のころである自力の諸行の往生が説かれ、『小経』には第二十願のころである自力念仏の往生が説かれているとみる側があります。これはお釈迦さまの本意は他力念仏にあるのですが、それを直接に受け取ることができない人に対して説かれたのが『観経』『小経』

の自力諸行、自力念仏の方便の教えであつて、眞実の他力念仏に引き入れるために説かれた誘引方便の教えとするのです。ここに私たちを必ず眞実に導き入れようという仏の大悲のところがわかります。

季刊せいてんから